

7 授業分析会の様子

参観の視点より

中心発問でねらいに近づけたか？

子どもの思考を助ける板書になっていたか？

○「小さな力が大きな力になる。」から働くことの良さや支え合う大切さに気づけた。  
 ○ねらいに近づけるための工夫ができた。  
 ・ハンドサイン（発表者は全体の中での自分の考えの位置を確認し、発表を聞いている児童は自分の意見と比べることができた。）  
 ・ペアトーク（全体発表の前に2～4人の小グループで話し合いをすることで、自信を持ってクラス全員に向けて発表することができた。）  
 ・意図的指名をするための机間巡視（あらかじめ児童の反応を予想し、ねらいへ導くための指名ができるように机間巡視をした。）  
 ・迷いや葛藤を生むような切り返し。  
 ●ねらいとする「支え合い・共に生きる」は達成できたが、「協力」はできたのかどうか。  
 ●日常に振り返って具体的に考えることができたのかどうか。

○中心部分を浮き出させるために、場面ごとに色分けし、絵の貼り方にも工夫ができた。  
 ○思考の手がかりとなる言葉をはっきりと提示できた。  
 ○話の流れに沿いながら心情曲線を使えた。  
 ●心情曲線において、心情の定義や高さの基準が難しい。  
 ●心情曲線を上下の動きだけで表すと、多様な心情を表しにくいのではないか。

○成果 ●課題

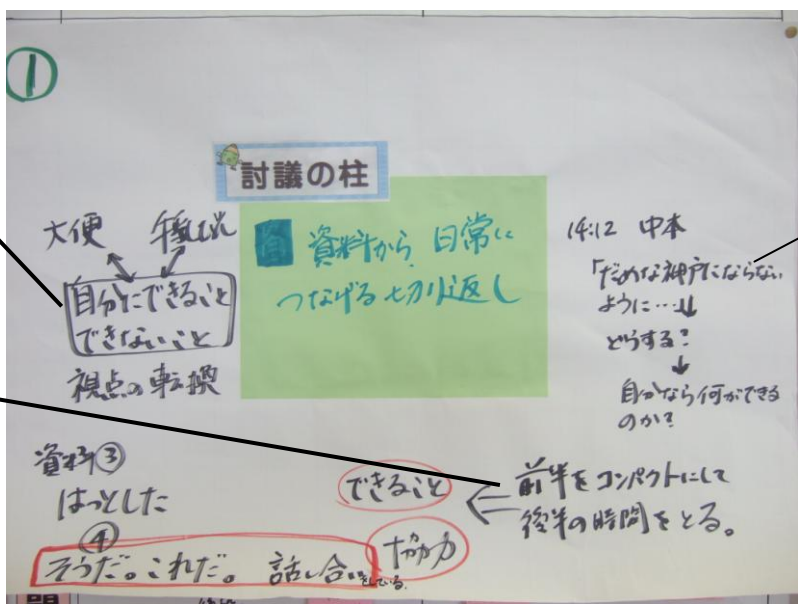
討議の柱

資料から日常につなげるための切り返し方

1 グループ

自分にできること、できないことを視点に切り返していく。

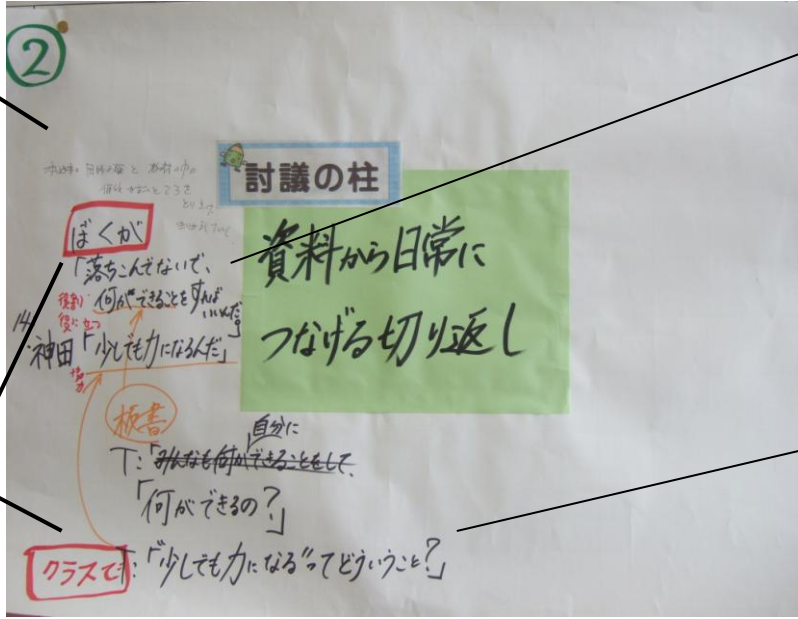
日常生活につなげるために切り返していく。



「だめな神戸にならないように・・・。」に対しては、「どうする？」や「自分なら何ができるのか？」と切り返す。

2 グループ

本時の目的と教材の中の価値が合うところを取り上げ、切り返していく。



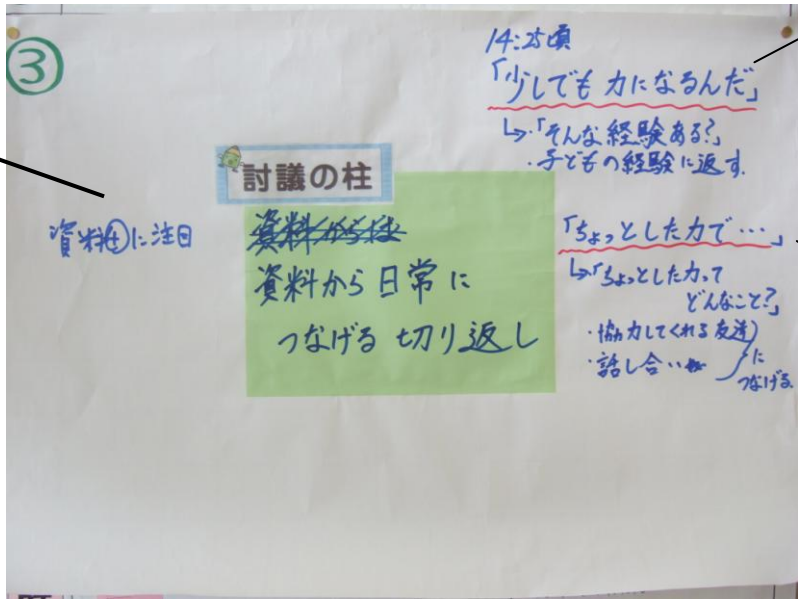
「落ち込んでないで、何かできることをすればいいんだ。」に対しては、「自分なら何ができるの?」と切り返す。

自分でできることやクラスでできることを視点に切り返していく。

「少しでも力になるんだ。」に対しては、「クラスで少しでも力になるってどういうこと?」と切り返す。

3 グループ

泣きさけぶ子に絵本を見せ、「そうだ。これだ。」と気づいた場面に注目して切り返していく。



「少しでも力になるんだ。」に対しては、「そんな経験ある?」と子どもの経験に返す。

「ちょっとした力で・・・。」に対しては、「ちょっとした力ってどんなこと?」と切り返し、一人ひとりの小さな力を合わせて協力することの大切さにつながる。

切り返す場面や視点

切り返し方

今日のまとめ

切り返しのヒントは資料にあり

## 8. 考察

### 【成果】

・去年から引き続きグー・チョキ・パーのハンドサインで自分の気持ちを表現する活動を全教科で取り入れてきた。一目で分かり、学級会や班活動でも子どもたちが自主的に取り入れるほど子ども達に浸透してきた活動である。話をしている人の方を向き、手はひざの上に置くよう細かく指導を重ねてきたことで、集中して聞く力と同時に相手の意見と比べ、新しい考えを発見する力がついてきた。



・ハートマークで「ぼく」の気持ちを心情曲線にすることは、主人公の気持ちを考えているという事がわかりやすく、一読では資料を理解しにくい子が助けられ、資料の中に入りやすく効果的であった。また、発表の前に二人組の活動を取り入れたたり、意図的指名で板書・発表をしたりすることで児童の思考の助けになり、さらに深い思考（周りも自分も笑顔になる・一人の力は小さいけれどみんなの力は大きな力）＝「ねらいとする価値」へと導いていた。

### 【課題】

#### 〈心情曲線の効用とハートの定義〉

心情曲線が多様な意見の妨げにならないかという意見が出た。道徳の授業では、多様な意見は中心発問や自己のふり返りで出せるよう仕組み、ねらいとする価値に近づいてその価値のすばらしさを実感することが肝要である。その仕組みの一つとして心情曲線や心情サークルがある。今回は、主人公の気持ちを多様に考える資料ではないので、この心情曲線は有効であったと考える。

「ハート」に明確な定義は無い。「主人公の気持ち」が上向きなのか下向きなのかを考えた。喜び、幸せ、動機、価値など様々な気持ちすべてである。これも仕組みの一つであり主人公の気持ちではなく主人公が「気づいた価値」をより深く考え、練り合っていく事が目的である。それゆえ明確な定義はそれほど必要ではないと考える。

ただし、教師側も児童側も使い慣れておく必要があり、学習中に子どもたちが混乱しないようシンプルに設定しておくことが大切である。また、よりよい使い方・工夫を見つけていく事が課題である。

#### 〈展開後段のあり方とゲストティーチャー〉

東日本大震災の直後だということもあり、この資料は児童の心に大きく響いたようだった。それゆえに展開後段では、「みんなのために石部の町をもっとよくしたい」という学校生活とは離れた意見が大半を占めた。大変素晴らしく嬉しい限りの考えだったが具体的な事柄が少なかった。原因は、前段から後段への補助発言の不足である。児童の発言「少しでも力になるんだ・ちょっとした力」を切り返し、いかに現実に引き戻し自己をふり返るかが課題であった。終末でゲストティーチャーご自身の毎日している事を話してくださったので、身近な生活のふり返りへとつながった。他の方法としては、「4Bのクラスはぼくらの手で」という学活につなげ、より深め実践へとつなぐ方法も考えられ



る。また、後段の発問を「今日の学習をして思ったことは何か」にすると新しい展開が生まれたようにも思う。

ゲストティーチャーの場合「時間」が大きな壁となる。最低10分の時間確保をいかに45分の中で構成していくのか。本授業では、書く活動の一つにし二人組の活動を増やし時間短縮できた。

これからも、児童の実践につながる価値への気づきを見逃さないよう授業の組み立てをしていけるよう努力し続けたい。